

子どもと共に参加する保育

はるにれの会

村尾 美保子

息子のとおるは、今三歳四か月になった。私は以前、発達の遅れた子どもたちと生活を共にしたことがあり、とおるが一歳になった頃から再び、母子でその保育に参加させていただいている。現在は週二回のグループで、自分の子どもの母として、またときには通園している子どもたちの保育者として、幼い人たちとよりよく生きたいと願っている。

私が、一歳になった子どもをつれてこのグループに行こうと思ったのは、日常生活の中で、子どもとなかなかゆったり過ごせていない自分に気付いたからだ。家事を離れ、子どものペースで生活するときを意識的に持ち、「子どものあとからついていく心」を取りもどしたいと思った。また我が家は、典型的な核家族なので、外の保育グループに通うことが、二人にとっての社交の場となり、生活に新しいリズムが生まれ、はりあいのある日々を持てるようになった。

その中で、いろいろな人や出来事との出会いがあり、それらを通して、子どものことや私自身のことを考える数多い機会を得ている。

(母として 保育者としての葛藤)

初めは、ただとおるの母としてグループに参加していたのだが、そのうちに母親という立場の私に、特別関心を寄せてくれる子どもたちと親しい間柄になっていった。U君の場合は、私が母親であるということに安心していられるらしく、自分の母親の退室後は、ママと言ってそのイメージを私に重ね合わせてくる。またT君の場合は、特に入園後の一年、私とおるの母と子としての存在がいらしく、私たちをみつけるとすぐ傍に寄ってきて、同行することを求めた。おそらく私たちのやりとりを見ていて、その観察者としてのゆとりが、人に直接気持ちを向けられるのが苦手であった彼に、警戒なく私共のもとへ近寄る力を与えたい。さらにまた、とおるが私にして欲しがることを、自分の母親に真似てみる

ことで、育ちそびれていた母子関係を自ら回復させようとしているようなところもあった。

このようにして、通園している子どもたちとの関係が深まっていくうちに、私の意識の中で、とおるの母としてだけではすまない保育者の在り方が、絶えず問われることになる。一方、とおるの方も、自分だけの母親ではない私に直面することになった。初めは、私がU君やT君に手をひかれ、要求されるのについてきていたとおるが、はつきりとそのことを嫌がり、二人だけでいられる空間に私をつれていく。三歳になり、ことばで表現できるようになったとき、「おかあさん いかないで」と言う。U君もT君も、とおるのことを拒否したことはない。とおるの母親だとわかっているので一緒にいることを拒みはしない。それなのにおるの方は、同じ空間にいることすら嫌がる。U君やT君が、親しげに私の傍に寄ってきて手を引くと、とおるの方は、取られまいと反対の方向に引っぱる。すると、U君やT君もそれまで以上に強く私を引く。そのようなとき、どちらもえらば

ず、ただその時を持ちこたえるだけで精一杯になってしまふ。三歳になったばかりの子どもに、ことばで説明して納得させることではないと思しながら、感情的になつて、「お母さんは 他のお友だちともいっしょに遊びたいのよ。」と言つてみたこともあつた。兄弟を育てている人は、養子も共に育てている人は、このような時を、どの様にしてのりこえていくのだろうかと思う。

(葛藤の中で確認できたこと)

私はそんな日の夜、一人で思いをめぐらしながら、我が子ゆえにいつも後回しにしたり、我慢させようとすることだけは慎まなければいけないと、自分の中で確認する。

また一人で考えているだけでなく、保育後の話し合いで、困っている自分を伝える。伝えながら、母子共に見守り励まされていることを強く感じる。保育中も、何と他の保育者に助けられ、支えられていたことかと思う。その中で一人の保育者が「そうやって、葛藤があるって

ことがまたいいんだよねえ。」と言われた。そのときのその発言は、子どもの立場にとつてという意味であつたのかもしれないが、私もまた、何かひとつ、私の枠をこえた大きな見方に出会つたようで、あらたな思いになつた。それまでの私は、そのような現実の場面を、子どもたちにとってマイナスの意味でしかとらえていなかったと思つた。だから、私自身も、自分の力のなさを責めるような思ひになつて苦しくなつてしまつた。子どもたちにすまないという思ひに身動きがとれなくなり、彼らをもまた、窮屈にしてしまつていただろう。

あるとき、私の気持ちの原点に帰ろうと、とおるにそつて一日を過ごした。それまで彼が気持ちを込めて遊んでいたものを、不意に他の大きい子に奪われた。声をあげることも泣くこともせず、からっぽになつた手許をそのままにして立つていた。そうか……この子どもがいやだったのは、U君やT君ではない。自分の気持ちを入れ、自分自身をこめていたものを不意に、外の力で奪われる。そのことがたまらなかつたのだ。他の子どもに手

を引かれてそこを立ち去る母親も、このおもちゃと同じであった。この日以後、私の気持ちもひろがった。私の手を引かざるを得ないU君やT君の気持ちもある。とおるの気持ちもある。こうすればよい、ああすればよいといった具体的な方法が見いだされたわけではない。ただ、そうせざるを得ない子どもの心につれて、私の気持ちひろがったのだ。とにかく、今はこうしてああしてと、そのつど思いつく限りの工夫をしながら、そのときそのときを迷いながら共にいつづけよう。そのうち、子どもたちの方が、自分たちで、この時をきりひらいてくだらう……。

(とおるの世界のひろがり)

そうこうしているうちに、つい最近のこと、とおるが「ぼくは おねえさんとあそぶから、おかあさんは おともだちとあそんで。」ときっぱり言う。すてきな実習生のお姉さんとの出会い、そしてそのお姉さんとの間で築かれているらしい楽しい生活が自信となって、母にこ

う表明させている。着がえやおしっこ、お弁当などを気にして現れる母親に、今こんなに楽しく遊んでいるのに邪魔しないでよと言わんばかりの表情をする。一方で、とおるの心をとらえる子どもも存在するようになった。

K君は、二歳の頃からこのグループに通ってきており、来年度は養護学校の一年生になる。内面はたいそうデリケートなのだが、表現される行為は、我が道を行くという感じで、他の子どものファンも多い。他者に威圧感を与えることなく、自己の存在感をしっかりと持っている。そのK君に、畏敬の念にも似た気持ちを抱いている。グループの中で、ブランコに乗り、大きく揺すりながら「やだもん。のせないもん。」と言っているK君の様子を、私と二人で行く公園で真似てみる。そして、「すごいねえー。K君みたいだねえー。」と言う。また「K君ておもしろいねえー。おもしろいけど、ちょっとこわい。」とも言う。とおるの相手をしていただいている実習生の報告でも、保育中K君の姿をみかけるとそのあとをついて行き、高い所にあるスベリ台をすべった

り、三輪車をこごとししたり、いつもは慎重で実習生の手助けを求めるようなことや、大人からの誘いかけではなかなか入ろうとしない追いかけてこなども自分から始めようとするとのことだ。ことばや動作によるK君からの直接的働きかけがあるわけではない。ことばのレベル以前の、子どもたちの中にある共通の世界で、とおるの心が響き合っているようだ。

(子どもの背負う重荷)

とおるにひきつけられたようにやってくる子どもたちもいる。前述のT君の場合もそうであったが、M君の場合は、必死に激しいかたちで追い求めてきた。M君は以前このグループに在園していた子どもで、現在は地域の公立小学校の普通学級の二年生である。月一回相談に通ってきているそのM君が、学校生活で大変な時期があり、パニック状態に陥ることが多いときがあった。園内に入ると、とおるの存在にひきつけられたようにやってきて、正面から顔をたたたく。おびえて激しく泣くとおる

に、あたかも自分の激しく泣きたい気持ちを表現させているようであり、より幼い者を追いつめることにより、自分自身を追いつめていこうとするような切迫感が漂っていた。他の幼い子どもたちも多くいる中で、何故、とおるだけがえらばれたのかよくわからないのだが、もしかすると直感で、一番重荷をしょっていない存在として感じられたのではないだろうか。

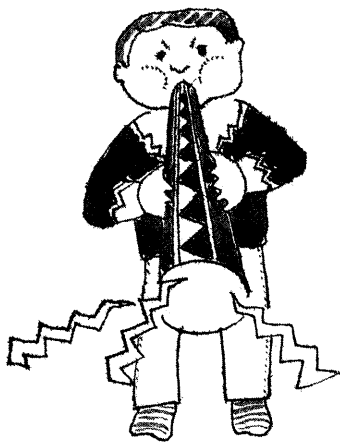
人生のごく初期の段階から、発達の遅れに対する不安・心配に、気持ちの動揺することが多いと思われる大人の中で育った子どもたちと、そのような心配は一応なく、今のひとつひとつが、希望につながり嬉しい大人の中で育った子どもは、ある意味では、今自分があることの感じられ方が異なってくるだろうと思う。とおるの場合、子ども時代の苦労は彼なりにあっても、やはり全体として、幼いときの特権である明るさ・柔らかさ・温かさが彼を代表しているように思える。発達の遅れといった烙印を押され、重荷をしょわされた子どもたちには、「子どもは、こうであっていいんだよ。」ということをし、

とおるがその存在全体で表現しているように思えるときがある。

(母親たちと話す中で)

通園している母親たちからもまた、子どもにとって、今何が大切であるか、しっかり足許をみつめる姿勢、立ち止まって今を深く掘り下げ、豊かに生きていこうとする姿勢を学ぶことが多い。

U君のお母さんは、とても知的な方である。成長のプロセスで、U君が他の子どもたちにギュウッと抱きついたり、母親をかんだりつねたりすることが激しい時期があった。日常生活の中でU君の気がかりなことを話された後「愚痴を言ってもいいですよ。」と言われる。U君のお母さんは、このままでよいのだろうか、いつまでこんなことがつづくのだろうかといった今を迷いながらも、放り出さず、何が子どもにとって大切であるのか、絶えず確認していらっしやる。いろいろ話をしながら私もまた同じ幼時期にある子どもの母親として、一緒に考



え困り合う。そこに関わる母親の在り方を模索していくことは、とりもなおさず自分の子育てに通じるものである。子育ての最中に、このような場に参加できている私は、しあわせなことだと思う。

以前の私は、子どもの側にいたいということだけが願っていたが、今は、母親にとってもという思いが強くなっている。日常生活の中で、母親にとって子どもの困った行動が目立ってしまうとき、母親自身の生活もまた大変なときなのだと思う。そのようなとき、母親一人だ

けの中でしょい込まず、心をひらいて不安や悩みを話していく。そしてその中で、少し気持ちが整理され、再び自分を支え直して子どもと出会う。同じことでも、迷ったりこれでいいんだと思ったり、その繰り返しの中で、子育ての柱ができていくのだろうと思う。

大変なときをのりこえていらしたU君のお母さんが「Uのことを私たち家族は結構気に入っているんです。本当に子どもに育てられているという感じがします。でもまた、迷うことはあるでしょうけど……。」と言われた。そのことばを、私もしばらく、自分の中でためためにつづけていた。

いわゆる統合教育が多数の健常児といわれる子どもたちの中に少数の障害児といわれる子どもたちを入れるのに対し、はからずもそれとは逆の形で保育に参加することになった。

このささやかな試みを通して出会ったいろいろな体験を記しながら、母親として、同時にセラピ―的要素を必

要とされる保育者として、子どもたちと生活を共にしていく中から生じた葛藤、母子でグループに参加していることの意味などについて、少し私の感情を整理してみたと思った。

保育の中にあつては、楽しくしあわせなことばかりではない。社会の縮図とも思えるような予期せぬ困難に、子どもも大人も出会うことがある。とおるにしても、存在そのものをおびやかされるようなこともあつた。トラブルを避けるため、しばらく休もうかと考えたときもあつた。しかしそれではいつまでも解決につながらない。関係を持ちつづけていく中で、相手に対する理解が生じ、それぞれのかかわり方も変わってくる。子どもが困難なことに出会わないようにするのはなく、出会ったとき、どのようにのりこえていけるか、そして大人にはどのような手助けができ、またすればよいのか、そのことが大切なのだと思う。

子どもを育てているとき、頭では理解できているように思えていることでも、そのときわき上がってくる感情

をどうしようもなくなることがある。そのようなとき、自分の未熟さを責めるより、現在の私もまた成長のプロセスにある人というとなえ方をしてみることで、先がひらかれていくように感じられる。「生きていることにはすべて意味があり、それは成長につながる。」とあるときこの先生が言われた。そう思えるようになってから、大人の私もずいぶん生きていくのが楽になった。母親が、いろいろな困難な状況を意味あることとして、自分の中をしっかり位置づけられるようになったとき、子どもにも意味ある体験として、生きていくことだろう。

このグループの中で、とおるがあたりまえに通過していることに、こだわりを持ってなかなかすすめないでいる子どもに出会うとき、我が子にとってその行動の意味を立ち止まって考えるきっかけとなる。とおるの方も、母の目の届かないところで、両親とは異なる人々の世界にふれて、着実に大きな人になっている。子どもと共にこの保育に参加しながら、それぞれの成長のときを味わっている。

幼い人たちとの生活の中で、私が足許のささやかなこととに希望を見いだし、もっと先へもっと多くではなく、今の時に委ねながら、ひとつひとつを深く、あつく受け入れられるようになりますように……。そして、とおるが社会へ出ていくとき、幼児期のここでの様々な出会いが、弱い立場の人の側にとって、感じたり、考えたりできる人に育ててくれるだろうと楽しみにしながら、このレポートを終わろうと思う。